

ふるさと奥尻通信

平成24年9月25日
奥尻町教育委員会発行
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭語

・稲の穂もたれし平和の小村かな 愛染 ・世の中を風にまかせるいなほ哉 一葉
・畝とりどり稲穂縄にもたれて 東洋 昭和三年之中秋 『千畳開村記念奉納句集』より

特集 離島の米作り —奥尻島稲作の先がけ、宇宙長造—

収穫の秋、島の田んぼはすっかり穂が垂れ、9月中旬に刈り入れが行われました。奥尻島での米作りの歴史を辿ると、明治20年頃までさかのぼります。明治中期、奥尻の主要産業たる漁業は、同18年～26年まで安定した漁獲高を記録し、全盛期を迎えていました。しかし、盛況を見せていた練漁は同27年から時々不漁の年がはじめており、島の漁業を中心とした経済は不安定な状況でした。こうした経済不安が新漁法の開発や畑作の本格化を促し、奥尻は明治30年代初めに転換期を迎えることとなりました。

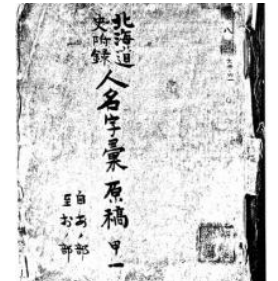
奥尻島稲作の先がけとされる人物に、青苗地区の宇宙長造があります。長造は、天保9年(1838)石川県珠洲郡西海村字狼煙(現 珠洲市)で生まれ、函館、札幌を経て明治17年に奥尻島へ移住しました。同20年、青苗村、薬師村の総代に就任し、農地開拓やホタテ製品の加工場を手がけました。明治20年より青苗村ワサビ谷地にて稲作の試作に熱心に取り組み、同志を募っての共同経営で造田に挑みました。しかし、当初は思うような成果がなく、個人経営の状態におちいるなど苦労を重ねました。試作の成功は同29年のことで、その後ヤナメ谷地、蓬谷地で5段歩以上の水田を造りあげることができました。以降、他の農業家も一定量の成果をあげることができたため、「離島最北」の稲作が普及していきました。明治40年時点で、うるち米7.3町歩(約72400㎡)、95石(約6トン)の収穫があったと記録されています。



実った稲穂 (富里地区 9月中旬)



宇宙長作 昭和17年



北海道史附録人名字彙



水張り和田植えの風景 (富里地区 5月中旬)「写真:宇宙 満」



“稲垣” (富里地区 9月中旬)

奥尻島内の水田地帯は富里地区と米岡地区の2ヶ所であり、前者は明治中期から、後者は大正末期から開田されて現在に至っています。昭和中期ころまでは、他にも島北端の滝ノ潤地区や西岸の神威脇地区でも水稻栽培が行われていたそうで、人々の稲作への関心の高さがうかがえます。

奥尻島で栽培されている稲の品種には、「ふっくりんこ」、「ななつぼし」、「ほしのゆめ」などがあります。どれもモチモチ感があり、美味しい炊きあがりです。近年の北海道米はブランド化が進み、「うまい北海道米」というイメージができています。温暖化で容易に栽培できる環境になってきた、という見方もできますが、北海道開拓期以来、先人たちが稲作に取り組み、土地と気候に適するよう改良しながら、営農してきたことの成果でしょう。

今後は“うまい奥尻米”としてブランド化し、お客さんを喜ばせてあげたいですね。

参考文献:「北海道史附録人名字彙」北海道大学附属図書館蔵 池田貴夫 2012「奥尻島における水田稲作の変遷」北海道開拓記念館研究紀要 第40号、『奥尻町史』奥尻町

●宇宙長造関係年表●

天保9年	石川県珠洲郡西海村狼煙生れ
文久3年	向次郎兵衛の長女・スヤと結婚
明治4年	良作(次男)出生 写真参照
明治10年	郷里から函館を経て、札幌へ
明治17年	函館から奥尻島へ移住
明治20年	青苗村、薬師村の総代に推挙
明治22年	官林解除地に畑地をつくる
明治28年	ホタテ製造を開始し、特産品に
明治29年	ワサビ谷地で水田試作、成功
明治30年	私財を投じ法隆寺を勧請する
明治32年	小作人を入植させて開墾
明治34年	青苗川、赤川流域で水稻開始
明治42年	産馬の改良を試みる
明治43年	八雲より種牡馬を購入し種付け
大正5年	産駒は120頭に達する
大正5年	長造79歳で病気のため死去
大正末期	千畳(米岡)で新田開発進む
昭和5年	妻のスヤ83歳で死去

稲作の道具は様々ありますが、今回は唐箕(とうみ)を紹介します。これは脱穀後に、米と籾殻、雑物などを風力によって選別する道具で、唐という字の通り、元々は中国から伝わったものです。それは、江戸時代中期の元禄年間(1688~1704)のこととされ、以降300年の間、形態が変わることなく製造、使用されてきたものです。まさにこれがロングセラー。ヒット商品ですね。

本体には、山二の屋号とともに「似内共栄舎農機具工場」と印字されていますので、ここが製造メーカーのようです。また、「似内式二号」とも印されていますので、同社が独自に改良を加えた製品だったのでしょう。少々調べたところ、同社は当麻町の似内(にたない)さんが興した農機具会社であり、元々は各農家をまわって唐箕を改良して歩いていたのが事の起こりだったようです(ご教示:北見市、奥農機製作所)。近代以降、しばらくは本州の唐箕が北海道内へ移入されて使用されてきたものが、道内の製造メーカーの出現により、「道産化」がなされ、廉価で普及したものと推測されます。

この道具は、形は変わっているものの、現代でも「トーム」として製品化されており、手動と電動があります。小型化されていますが、原理、構造は同じですので、物事の仕組みは、昔も今も根本的に変化しないことの例えとも言えそうです。

参考文献:北海道開拓記念館監修 1993『北海道の民具』北海道新聞社



似内式(にたないしき)二号唐箕



屋号:山二

月刊 奥尻のつり 9月号

サビキ釣りの季節です。島内どこの港でも、夕方には小魚の群れが押し寄せ、海面がざわめいています。それを追って、ブリの幼魚フクラギも入ってきています。奥尻港では、アジやサバ、神威脇漁港ではサバやイワシなどが釣れています。サバは15~20cmと良形ですので、開いてフライか味噌煮にするとおかずの一品にちょうど良いかも。



奥尻これなんだろう? 第6回

赤石の山ヶ崎にポールが一本立っています。さてさてこれはなんでしょう?

先月の答え:フノリ人工繁殖の実験施設



ださきが風どまをとえ間奥
きん盛景のし再題る発尻八
まだ家んに町た現し漁表島月
しとだに、民。すて師会災二
たかと聞懐が会る古町が害七
。色かか集場試写青あ復日
々、れしいにみ真苗り興、研青
教こ、い、はがかの、研青
えのこと震十報ら街一究苗
て人こい災五告街なよ会支
いはほう前まきなみみの所
た〇〇声のほれみーが中

漁師町再現に懐かしさ



そば打ちの様子

ご味いなのを二なしちをと学タミ
家しまがおユ調た、経寝五ー教
庭かしら母ー理。魚、験食・で育
でつた、さとを今釣、を六開イ
。た。懸んな必年り陶共年催ン
で味命方り要はな芸に生さグ
すはにの、と昨ど作し十れが
よも取指子す年をり、五ま町
！ちり導供るよ体、共名し民
今ろ組を達食り験そ同がたセ
度んん受も事高しば生大。ント
は美でけ島メ度ま打活人小

ナイト★ミーティング

残暑厳しかったですね。暑い日差しですっかりスルメになってしまいました。けれど私、夏バテはしたことはないのです。3回目のナイトミーティング、今年も私は食べてばかり。蕎麦、ハンバーグ、チキン南蛮、カレー、BBQにご飯と味噌汁。おかげでベルトの穴が1つ進んでしまいました！やっぱり食べるって幸せ♪夏バテ防止の秘訣です(高燃費のしんた)。

新米之記録(編集後記)

事 光水にりかすタ
前教・・・沢を整ているー稲
予育人時開体をつえ削石こで穂
約委数間催験出けてりをとはふ
を員・・・料していな使が、れ
お会先九毎・ま仕きが用出勾あ
願の着〇週無す上まらし来玉い
い稲三分木料。げす、てま作研
し垣〇程・を。好、す、り修
まま名度土 行最き紙。をセン
すで、 曜、い後なヤ軟体ン
日、は形スら験

勾玉作り体験募集中



奥尻島なつかし風景

富里 ワサビ谷地の水田 昭和43年